



Title	学界の動き
Author(s)	
Citation	一橋論叢, 25(1): 93-96
Issue Date	1951-01-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/4508
Right	

學界の動き

國際法學會

國際法學會は、終戦後三度目の年次大會を、神戸市灘區高羽の神戸大學において、昭和二十五年五月六日(土)、六日(日)の兩日に互つて、舉行した。國際法學會が、創立されたのは、明治三十年であるが、創設以來五十有二年、初めて地方に進出して、大會を開催したことは、まさに特筆されるべきことで、參會者六十有餘名、極めて盛會であつた。

國際法學會の一昨年の大會は、世界平和機構の問題、昨年の大會は、太平洋同盟の問題を共同研究課題となしたが、本年の大會は、對日講和の問題を、その中心課題となし、報告及び公開講演は、主としてこれに關連するものを取り上げた。國際公法、國際私法、外交史の外に、國際經濟の立場より、共同研究を進めることは、本學會の大會の一大特色となつてゐる。

國際法學會神戸大會次第

◇第一日 五月六日 午前九時開始

午前の部 (研究報告)

(一) 入江啓四郎 「ソ連と對日講和」

時事研究所々長たる氏は、對日講和に對するソ連の立場を、會

議の方式と在滿日本資産の二問題に限定して説明し、前者については、四五年のポツダム會談の経過から外相會議方式によるべしとの主張の妥當性を論じ、後者については、ヘーグ陸戰法規の規定から沒收の不當を指摘した。

(二) 英修道氏「極東における局外中立の先例」

慶大教授たる氏は、板倉及び尾佐竹の兩博士の研究に端を發する本件の研究を、日本及び中國の資料に基ずいて忠實に發展せしめ、極めて實證的な研究報告をされた。

正午 晝食並に理事評議員會

午後の部 (公開講演) 午後一時開始

(一) 宮田喜代藏氏「世界經濟發展の本質的動向」

(二) 田岡良一氏「永世中立の歴史」

(三) 横田喜三郎氏「對日講和と自衛權」

三博士の講演は、それぞれに特色あり、講堂に參集した四百餘の聴衆は、時局がら社會的に關心ある問題のこゝとて、終始熱心に傾聽した。特に宮田氏の世界經濟の發展の波動と世界平和との關連についての講演は極めて意義深く聴取された。

報告座談會 (教員食堂にて)

尾上正男氏「實地に見たソ連事情」

元建國大學教授の氏は、露語に通じ、四年餘の捕虜生活の體感から、具體的にウズベック地方を中心とした興味あるソ連事情を開陳された。ソ連の生活水準はまだ低いといふ印象が詳しい數字から察知された。

◇ 第二日 五月七日 午前九時開始

午前の部 (研究報告)

(一) 西山重和氏「國際私法規の國際法性」

九大教授の氏の大會における處女報告、全人類的な法意識を尊重して、衝突規則の國際的統一の理想を主張された。

(二) 大淵仁右衛門氏「國際社會における主權的平等の原則と

多數決」

傳統的な主權理論から多數決の場合にもなお國家意思の平等性は依然として存するとの強い斷定を固守された。

正午 晝食並に理事評議員會

學會の寄付行爲の改正を決定し、理事の定員を二十五名以内に改め、理事制度を全國的に擴大し、栗山、前原、田畑、武内、川上、久保、齊藤、西山の八氏を新たに理事に追加した。

午後の部 (研究報告)

(三) 立川文彦氏「昭和外交史の一斷面——內的基盤の分析と

東京裁判——」

印度判事のポール判決を、特に取上げ、一九三六年に行われた日本の政策轉換の實質的な內的分析に努められた。

總會並に懇親會

山田三良理事の挨拶で始まり、大會の全議事を終り、愉快なテニススピーチの後、散會した。尙昭和二十六年大會は五月一橋大學にて開催の豫定である。(大平善楷)

日本經營學會

日本經營學會は現在會員數約四百名を擁し、終戦後の立上りの最も早かつた學會の一つに數えられるであろう。全國大會の第一回目——第十九回全國大會——が昭和二十一年十二月に明治學院専門學校において開催されている。爾來定期の全國大會が毎年十月または十一月に神戸經濟大學、早稻田大學および神戸商科大學において營まれて來たのであるが、そのほかに昨年七月には小樽商科大學で、また今年五月には大分大學で臨時の全國大會が開催せられた。そこで終戦後今日までに全國大會は定期、臨時を合せて六回行われたのであり、近く關西學院大學で行われる本年度定期全國大會を加えれば、五年間に七回開催せられることとなる。このほかに關東部會及び關西部會がそれぞれ年に六回位の研究報告會を營んでいるのであるから、少くとも量的には學會の活動ははなはだ活潑だといつても過言ではないであろう。

大會における研究報告者の數も次第に増加して昨今では二十數名に及んでいる。報告は共通論題と自由論題との二つに分れるが、いま共通論題としてかかげられたものを列擧するところの通りである。

第十九回 (明治學院) —— 「日本經濟の再建と經營經濟學の課題」

第二十回(神戸經大)——「經營學の再吟味」および「經濟變動と經營」

第二十一回(早大)——「經營合理化の諸問題」

小樽大會——「日本經濟の安定と經營の諸問題」

第二十二回(神戸商大)——「經營學の基本問題」

大分大會——「統制撤廢と中小企業」および「稅制改革と企業經營」

なお本年度の第二十三回大會では株式會社の問題が取りあげられることとなつてゐる。自由論題はもとより統一をもたないが、ことに昨今は勞務管理、人事管理に關する問題が目立つて多いように思われる。報告のテーマや報告者の名前を一々列擧する紙幅をもたないが右によつて推察せられるように學會の報告は大體において時局問題を取りあげることによつて經營學そのものを反省しようとする志向をもつてゐるよう思われる。

關東および關西の各部會研究會は一回に大體二名位の報告者をして開かれる。ここでは新しいジェネレーションの人々の輩出がとくに目立つてゐる學會の編集になる「經營學論集」は大會の報告を収録して戦後つぎの四冊が何れも同文館から刊行されてゐる。「日本經濟の再建と經營經濟學の課題」(第十七輯、昭和二十三年二月發行)「經營學の再吟味・經濟變動と經營」(第十八輯、昭和二十三年十二月發行)「經營合理化の諸問題」(第十九輯、昭和二十四年十月發行)「日本經濟の安定と經營の諸問題」(第二十集、昭和二十五年六月發行)(藻利重隆)

學界の動き

社會政策學會

社會政策學會が新たに設立され、その第一回大會が去る七月八日、九日の兩日にわたつて慶應義塾大學、東京大學で開かれた。以下簡単に、その状況を報告する。

かつての日本社會政策學會は明治三十年創設以來、幾多の輝かしい業績を挙げたのであるが、大正末年以後その活動を停止してゐる。新たに設立された本學會は、舊社會政策學會の傳統と名稱を繼承し、社會問題及び社會政策の研究を目的とする。有泉教授ら二十七教授が發起人として盡力せられた。

大會第一日午前中は會則の審議と役員の選任が行はれた。學會は舊社會政策學會の理事であられた諸先生、本學では藤本幸太郎先生を名譽會員に戴き、また規約ではとくに代表者を置かないことになつてゐる關係上、學會代表者としての意味を含めて顧問に大内兵衛先生が就任された。次に幹事、監事の役員も發起人一任とし簡単に選任して議事を終了し、午後の研究報告會に移つた。

午後の學會では、まづ近藤文二教授から社會保障について、社會保障制度審議會の作成した試案を中心にして、批判的報告が行はれた。社會保障は生活水準の保障を行ふが、この生活水準の理解の仕方に問題があり、現状では社會保障の社會事業化の危険がある。これが教授の論旨であつた。次いで末高教授が

らアメリカの社會保障に關して、視察の體験にもとづく報告があり、最後に大友教授の最低賃金論が最近の論争を中心にして報告された。この問題に關しては、慶應の黒田氏、京大の岸本助教授等から質問が出て活潑な討論が行はれたが、近藤教授の場合と同じく、最低生活水準の問題が資本蓄積過程との關聯において取り擧げられたのである。

この點は翌日の岸本助教授の報告「社會政策の本質をめぐつて」における大河内理論の批判と自説の主張にいたつて、さらに問題とされ、大河内教授の反批判、藤林、服部兩教授の岸本説に對する批判があつた。何分問題が極めて重要であるため、多大の關心が寄せられたことは當然であらう。論點は岸本助教

授が社會政策の主體を總資本とは相對的に獨立した國家とした點、社會政策の目的を勞働力の保全に限定して、勞働政策の一部なりとした點、さらに階級闘争との結合關係を重視する點、の三つに集中された。午後には東大社研の氏原氏から、戦後の日本勞働組合について、同研究所の行つた實態調査の報告があつた。地味な問題ではあるが、その眞摯な態度が好感をもつて迎へられたと思ふ。

尙、大會は年一回開催となつてゐるが、本年はとくに十一月に京都で今一度大會を開く豫定である。本稿が讀者に見える頃は、既に京都大會も終つてゐるであらう。(小山路男)